

国際基督教大学高等臨床心理学研究所・宮城学院女子大学発達科学研究所 ジョイントプロジェクト活動報告（2）

足立 智 昭¹

2011年9月24日、国際基督教大学(ICU)高等臨床心理学研究所と宮城学院女子大学(MG)発達科学研究所ジョイントプロジェクトとして、「震災復興心理・教育臨床センター」が開設され、下記に示す事業が、隔週土曜日を原則に、本学を会場に実施された。

1. 被災者相談

個人（児童・生徒・学生、保護者、保育士、教師、医師、看護師、心理士等）、幼稚園、保育所、学校等を対象とした相談（心理臨床・発達臨床、精神看護臨床、その他）。

2. 研修会等の開催

教師等を対象とした被災者・支援者心理教育、心理士等を対象とした被災心的外傷対応・治療技法研修会の開催。

3. その他

ニューズレター、パンフレット等の刊行物の発行、その他、前項の目的を達成するために必要と認められた事業。

その結果、活動が開始された2011年10月より2013年2月（本稿執筆時）までに、1の「被災者相談」にあたる個別相談53人、コンサルテーション6団体、スーパービジョン36人、2の「研修等の開催」にあたる小講義160人、大講義260人、ワークショップ399人と、合計で908人と6団体が本センターを利用した（数字は延べ人数）。

個別相談は、本学学生を中心に、幼児から成人を対象として実施され、軽度から重度のPTSD、あるいはうつ症状を示すケースが多く見られた。

コンサルテーションは、被災地支援を行っている一般社団法人、NPO、企業などが中心で、それ

ぞれ実施している支援が、被災者のニーズに合っているかどうか、あるいは今後の被災者支援はどうあるべきかといった相談が中心であった。また、スーパービジョンは、医師、心理士、保健師等、公的機関に所属し、被災者支援を行っている専門家が中心であり、それぞれの専門性における被災者支援における迷いや代理トラウマなどに関する相談がなされた。

小講義は、10回シリーズで実施され、トラウマやPTSDに関する初学者にも分かりやすい講義が行われた。これらの講義には、被災地でボランティア活動を行う多くの学生が参加した。また、大講義は、保育士や臨床美術士などを対象に実施されたもので、公的機関や日本臨床美術協会などの要請によって行われた。

また、本センターの中心的事業であったワークショップは、主に下記の5種類のものが実施された。

1. サポートグループ
2. 教育的対話
3. セット(Socio-Energetic Training; SET)
4. SMG (Story Making Group)
5. ジョークセラピー



1. 宮城学院女子大学発達科学研究所所長



いずれも少人数のグループを対象とする心理技法であり、学生・大学院生、心理士、保育士、保健師、医師等が参加した。

最も多く実施されたワークショップは、サポートグループと教育的対話であった。

サポートグループは、参加者が心に秘めたトラウマに、安全で安心な空間で触れ、場合によっては出来る範囲で言葉にし、またそれを丁寧に心に収めるという体験を、繰り返し行うことで、PTSDの症状が寛解、または治癒される心理技法であった。特に、このサポートグループの継続的な参加者における治療的効果は大きく、全く顔を上げることも出来ず、言葉を発することも出来なかった参加者が、日常生活を取り戻し、笑顔で未来を語る事ができるようになった姿は、感動的ですらあった。また、半日(45分のセッションを3回と振り返りセッションから構成される)の参加であっても、その効果を実感する参加者も多く、ある参加者からは、「昨日は初めてで素晴らしい体験をさせていただきました。ありがとうございました。まだ感動冷めやらぬ状態です。何より自分自身の心が軽くなりました」といった感想や、「ゆったり流れる時間の中で、家族と一緒にいるような体験をしました」といった感想が得られている。

また、教育的対話は、単なる情報交換としての対話ではなく、今、目の前にいる人の心と、その人と向きあうと決めた私の心が、「はたらき、はたらき合う対話」であり、対人援助を専門とする参加者に好評を得た。毎回、呼吸法から始まるこのワークショップを体験すると、普段、家庭、職場、学校などで行われている何気ない対話が、い

かに自分本位でなされており、心が触れ合う以前に、閉じられてしまっているかを実感するものであった。

その他、本センターの大きな事業として、2012年3月24日、25日の両日、国際力動的心理療法研究会(IADP)第18回年次大会プレ・カンファレンス(会場:仙台国際センター)、および2012年9月1日、2日の両日、同年次大会(会場:宮城学院女子大学)が開催された。これらの大会には、国際集団精神療法・集団過程学会理事のボニー・ビュークリー博士を始めとする国内外の著名な研究者が講演やワークショップを行うなど、多くの参加者を得た。また、これらの大会では、東北地方では初めてとなる「アゴラ」が実施された。「アゴラ」とは、元来、古代ギリシャの市民の重要な議論が語られ、また物が行き交う市場が開かれた広場を意味するが、9月2日に実施された「アゴラ」では、大学体育館において8種類のワークショップが同時進行され、参加者はそれぞれに、自らのニーズに合ったワークショップに参加した。

以上のように、およそ1年半におよぶ「震災復興心理・教育臨床センター」の活動は、多くの参加者を得、被災地支援を行っている公的機関とは異なる役割を果たしたと考えられる。その特徴は、「第1に保育・教育現場の保育士・教師、第2に被災地支援を行っている医師・保健師・ソーシャルワーカー・心理士、第3に保護者・学生・生徒が、地域復興の三本柱として区別なく、講義やワークショップに参加したこと」(ICU小谷英文教授)である。これら3者が、安全で安心な空間を共有し、あたかも家族のような時間を過ごしたことは、今後の被災地の心の復興にとって大きなヒントになると考えられる。

さて、3.11から2年目を迎えようとしている現在、被災地の心の復興は、未だ道半ばにある。たとえば、宮城県警本部から得た最新の下記の資料は、被災地(直接津波の被害を受けた沿岸部だけでなく、内陸部においても)では、家庭や地域の状況が悪化していることを示唆している。

た個人・団体に授与するFriends of ICU賞を受賞されたことを心からお喜び申し上げます。

1. DV相談受理件数

2010年 1348件
2011年 1397件
2012年 1856件 (前年比32.9%増)

2. 虐待相談受理件数

2010年 225件
2011年 190件
2012年 254件 (前年比33.7%増)

3. ストーカー相談受理件数

2010年 672件
2011年 646件
2012年 985件 (前年比52.5%増)

これらの状況を鑑みると、「被災者の複数のニーズに対応する臨床的手法の効果を明らかにする作業と、これらの訓練および臨床手法を共有する作業に被災地全体として取り組むこと」(ICU 西川昌弘准教授)が必要であり、5年先、10年先を見通した「心、家族、地域の復興」のための戦略の再構築が求められていると言える。

本センターの活動は、主に隔週の土曜日に限られており、常設の公的機関と比較すると、その活動は自ずと限定されたものとなる。しかし、民間の機関だからこそ自由に発想し、自由に行動できる利点も有する。本センターは、2013年度以降、ICUに代わり、PAS心理教育研究所との共同プロジェクトとして運営される予定である。また、ライオンズクラブ(仙台青葉ライオンズクラブ他)からの義援金等により、運営される予定である。国際的な機関のバックアップを得ることで、本センターの事業をより発展させることが可能になると期待される。

謝辞

本センターのこれまでの事業を行うにあたって、小谷英文教授(本センター・オーガナイザー)を始めとするICUの先生方のご尽力に、本学として心から感謝申し上げます。また、小谷教授のチームが、ICUがその年で最も顕著な功績が認められ